



教会組織と一致

暗唱 聖句

「しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」

(マタイ 20 : 26、27、新共同訳)

「あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない」

(マタイ 20 : 26、27、口語訳)

今週の 聖句

エフェソ 5 : 23 ~ 27、マタイ 20 : 25 ~ 28、テトス 1 : 9、
マタイ 16 : 19、ガラテヤ 6 : 1、2、マタイ 28 : 18 ~ 20

安息日 午後 12/15

今週のテーマ

私たちセブンスデー・アドベンチストは、人類のためにイエスが成し遂げてくださったことを信じる信仰のみによって救いは得られる、と信じるプロテスタントのクリスチャンです。キリストが私たちのために成し遂げてくださったことの恩恵を受けるために、私たちは教会や教会の階層組織を必要としません。私たちがキリストから得るものは、大祭司としてのキリストから直接得るのです。キリストは十字架での私たちの身代わりであり、天の聖所で私たちの救いのために執り成しをしておられる大祭司です。

それにもかかわらず、教会は神が生み出したものであり、神が私たちのために地上に置きました。ただし、救いの手段としてではなく、救いをこの世にはっきりと示し、あらわすのに役立つ手段としてです。教会は、福音をこの世に広めるためにイエスが創造された組織です。組織は、それが教会の宣教を強固にし、可能にする限りにおいて重要です。教会組織がなければ、イエスの救いのメッセージは、これほど効果的にほかの人たちへ伝わりませんでした。教会の指導者たちも、彼らが一致を促進し、イエスの模範を体現するという点において重要です。

私たちは今週、なぜ教会組織が宣教にとって不可欠なのか、いかに教会組織が教会の一致を促進するのかということについて学びます。

これまでの課ですでに触れたように、新約聖書の中で、教会は体というたとえであらわされています。教会はキリストの体です。このたとえは、教会や、キリストとその民との関係のいくつかの側面をそれとなく示しています。キリストの体として、教会の存在は、まさにキリストにかかっています。キリストは教会の頭であり（コロ1:18、エフェ1:22）、その命の源です。彼がいなければ、教会は存在しないでしょう。

教会はまた、自己認識（アイデンティティー）をキリストから得ています。なぜなら、キリストが、教会の教理や教えの源、基礎、創始者だからです。しかし、信仰や教えは教会の自己認識にとって欠かせませんが、教会はそれ以上のものです。教会が何であるのかを決定するのは、キリストと、聖書の中に明らかにされているキリストの言葉です。それゆえ、教会の自己認識と重要性は、キリストに由来しています。

エフェソ5:23～27を読んでください。過去何世紀にもわたって指導者たちが服従という概念を悪用してきたために、私たちはためらいを覚えるかもしれませんが、それでもなお、教会は頭なるキリストに服従し、彼の権威に従わねばなりません。私たちがキリストを教会の頭として認めることは、私たちの究極的な忠誠がだれに属しているのかを思い出させるのに役立ちます。それは主御自身であって、ほかのだれでもありません。教会は組織化されるべきですが、その組織は常に、私たちの教会の真の指導者であられるキリストの権威に従属しなければなりません。

「教会は、キリストを土台として、その上に建てられている。教会は、キリストをかしらとして、キリストに従うのである。教会は、人にたよったり、人に支配されたりしない。教会の中の信任の地位を占めることによって、その人は他の人たちに何を信じさせ、何をさせるかを命令する権威が与えられると主張する人が多い。神はこの主張を是認されない。救い主は、『あなたがたはみな兄弟』であると宣言しておられる（マタイ23:8）。人はみな試みにあい、誤りを犯しがちである。有限な人間の指導にたよることはできない。信仰の岩は、教会内におけるキリストの生きた存在である。どんなに弱い者も、キリストにたよることができ、自分は一番強いと思っている者も、キリストを力としないかぎり、一番弱い者であるということがわかる」（『希望への光』887ページ、『各時代の希望』中巻183ページ）。

◆ どうしたら私たちは、「有限な存在」に頼るのではなく（そうすることは簡単なのですが）、キリストに頼ることを身につけられるのでしょうか。

イエスは恐らく、弟子たちが抱いていたと思われる権力をうらやむ気持ちを憤慨なさったことでしょう。彼らとともに働いていたときに、イエスはそのような瞬間を何度も味わわれました。弟子たちはイエスの王国で力のある指導者になることを切望しているようでした（マコ9：33,34、ルカ9：46）。最後の晩餐の食事のときでさえ、このような支配感や優越感が彼らの間にはっきり感じられました（ルカ22：24）。イエスは、御自分の民の間における霊的指導者について、御自分の考えをはっきり表明されました。マタイ20：25～28におけるイエスの勧告から、私たちは指導の原則を学ぶことができます。

「この箇所の中に、イエスは権威の二つの型を示しておられる。最初の型は、ローマ的な権威である。この型は、エリートたちがほかの人たちの上に階層的に立つ。彼らは決定権を持ち、下の者たちからの服従を期待する。イエスは、『あなたがたの間では、そうであってはならない』とおっしゃって、この型の権威を明確に退けられた。その代わりにイエスは、新しい権威の型を弟子たち示された。それは、彼らがなじみ深い階層的な型の徹底拒絶、またはその逆であった」（ダリウス・ジャンキーウィック『イエスのように仕える——神の教会の権威』、『アドベンチスト・レビュー』2014年3月13日号18ページ、英文）。

この物語の中でイエスが示された権威の概念は、鍵となる二つ言葉に基づいています——「僕」（ギリシア語で「ディアコノス」）と「奴隷」（「ドゥーロス」）〔日本語訳では「仕える者（人）」と「僕」〕。いくつかの聖書の訳では、最初の言葉が「仕える者、召し使い」と訳され、二番目の言葉が「僕、無給の使用人」と訳されていますが、いずれの訳語もイエスの意図を大きく損なっています。イエスは権威の構造を全面的に廃止しようと望まれたわけではありません。強調したかったのは、教会の指導者はまず神の民の僕、奴隷となる必要があるということでした。彼らの立場は、人々に対して権力を振るったり、支配したり、名声や評判を獲得するためのものではないのです。「キリストは、これと異なった原則の上にみ国を築いておられた。主は人々を権力の立場にではなく、奉仕の立場に召し、強い者を弱い者の欠点を負うために召された。権力、地位、才能、教育のある人は、それだけほかの人々に仕える一層大きな義務を負わされた」（『希望への光』959ページ、『各時代の希望』中巻369ページ）。

◆ ヨハネ13：1～20を読んでください。イエスは弟子たちに、どのような指導の手本を示されましたか。この箇所を通して、イエスは今もなお私たちに、何を教えようとされていますか。どうしたらここでの原則を、教会の内外を問わず、他者に対する私たちの行動においてあらわすことができますか。

Ⅱテモテ 2:15、テトス 1:9 を読んでください。パウロが教理や教えを純粹に守ることをどれほど重んじているかに注目してください。このことは一致にとって不可欠です。なぜなら、何にも増して、私たちの教えは私たちの教会を一致させるものだと言えるからです。重ねて言いますが、アドベンチストとして、つまり実にさまざまな職業や社会的地位、文化、背景を持つ人々として、キリストにおける私たちの一致は、キリストから与えられた真理の理解の中に見いだされます。もし私たちがこういった教えに関して混乱するなら、とりわけ終わりに近づいているので、混乱と分裂だけがもたらされるでしょう。

「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、^{おごそ}厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります」(Ⅱテモ 4:1～4)。

パウロはこれらの言葉を用いて、靈感を受けた彼の思いをイエスの再臨と裁きの日に集中させています。使徒は、この重要な勧告をテモテにするために、神から与えられたあらゆる権威を用いています(Ⅰテモ 1:1 参照)。テモテは、偽りの教えがあふれ、不道徳がはびこる終わりの時という状況下で神の言葉を説かねばなりません。彼が召されたのは、その働きのためでした。

テモテは教える働きの一部として、とがめ、戒め、励まさねばなりません。これらの動詞は、聖書によって与えられる導きを思い起こさせます(Ⅱテモ 3:16)。明らかにテモテの働きは、彼が聖書の中に見いだしたことを守り、教え、実行すること、しかも辛抱強く、忍耐しつつそうすることです。^{しんらつ}辛辣で厳しい叱責によって、罪人がキリストのもとへ行くことはめったにありません。パウロが書いたことに従い、しかも聖霊の導きのもと、仕える指導者の態度を持ちつつそれに従うことによって、テモテは教会における力強い求心力となるのです。

◆ 教会の指導者たちが教会の一致を保つのを助けるために、私たちにできる実際的な方法は何ですか。論争のさなかにあっても、どうしたら私たちは、不一致を促す力ではなく、一致を促す力でいつもいることができるでしょうか。

教会組織の主要な問題の一つは、懲戒への対応です。懲戒がいかに教会の一致を保つのに役立つかということは、時として扱いにくい話題であり、容易に誤解されます。しかし聖書的な観点からすると、教会の懲戒は二つの重要な領域を中心としています——教理の純粋さを保つことと、教会の生活や習慣の純粋さを保つことです。

すでに触れたように、新約聖書は、異端や偽りの教えの結果、とりわけ時の終わりにおいて、聖書の教えの純粋性を保つことの重要性を主張しています。不道徳、不正直、墮落を防ぐことで共同体の社会的評判を保つことについても、同じことが言えます。そういうわけで、聖書は「人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」(Ⅱテモ 3:16)とされています。

マタイ 16:19、18:15～20 を読んでください。聖書は、懲戒という概念や、私たちの霊的、道徳的生活の中での相互の説明責任という概念を支持しています。実際、教会の際立った特徴の一つは、この世からの分離、聖さです。私たちは聖書の中に、不道徳な行為に対して教会が断固たる態度で行動せざるをえなかった多くの実例を見いだします。教会の中では、道徳的水準を維持しなければなりません。

問1 教会内の難しい問題に対処する際に従うべきどのような原則を、次の聖句は教えていますか。マタ 7:1～5、ガラ 6:1、2

私たちは、教会の懲戒の必要性に関する聖書の教えを否定できません。懲戒がなければ、私たちは御言葉に忠実であることができません。しかし、これらの勧告の多くの中にある贖いの性質に注目してください。可能な限り、懲戒は贖罪的であるべきです。私たちはまた、私たちがみな罪人であり、恵みを必要としていることを覚える必要があります。それゆえ、私たちが懲戒を実施するとき、自分自身の欠点もはっきり自覚しながら、謙虚にそれを行う必要があるのです。

◆ 過ちを犯している人たちに対処することにおいて、どうしたら私たちは、処罰ではなく、贖罪の態度で行動できるようになるのでしょうか。

今期何度も触れてきたように（それは繰り返しに値することなのですが）、教会としての私たちは、宣教や伝道のために組織され、一体化させられました。私たちは、単に寄り集まって、自分たちが信じることを肯定し合う同じ考えを持つ人間の社交クラブではありません（それも重要かもしれませんが）。私たちは、自分自身が愛するようになった真理をこの世に伝えるために、集められたのです。

マタイ28:18～20においてイエスは、この世への宣教に関する最後の指示を弟子たちにお与えになりました。この弟子たちへのイエスの大宣教命令には、4つの鍵となる動詞が含まれています——「行って」「弟子にし」「洗礼を授け」「教えなさい」。ギリシア語の文法によれば、これらの節における本動詞は、「弟子に（する）」であり、ほかの三つの動詞は、それがいかにしてなされるのかを示しています。つまり、弟子が生まれるのは、信者が福音を宣べ伝えるためにあらゆる国へ行って、人々にバプテスマを授け、イエスが言われたことを守るよう彼らに教えるときなのです。

教会がこの命令に応えるとき、神の国は広がり、あらゆる国のより多くの人が、イエスを救い主として受け入れる人々の仲間に加わります。バプテスマを受け、教えを守るようにというイエスの命令に彼らが従うことで、新しい世界的家族が生まれるのです。新しい弟子たちも、彼ら自身がさらなる弟子をつくるときに、日々イエスの存在を確信します。イエスの存在は、神がともにおられることの約束です。マタイによる福音書は、イエスの誕生が「神は我々と共におられる」（マタ1:23）ことにほかならないという告知で始まり、イエスが再臨までずっと私たちとともにいてくださるといふ約束で終わっています。

「キリストは弟子たちに、彼らの働きが容易であるとは言われなかった。……主は彼らと共にいること、そして彼らが信じて進むならば、彼らは全能者の盾のもとに行動することを約束なさった。キリストは彼らに、雄々しく強くなるようにとお命じになった。み使いよりも強い、天の軍勢の将が彼らの隊列の中におられるからである。キリストは彼らの任務遂行のために万全を期し、その成果の責任をみずからお取りになった。主のことに従い、主と連携して働く限り、彼らに失敗はなかった」（『希望への光』1366ページ、『患難から栄光へ』上巻23ページ）。

◆ 再臨まで御自分の民とともにいるというイエスの約束の意味について、よく考えてください。私たちがイエスから与えられた命令を実行しようとするとき、私たちはこの約束によって、いかに影響を受けるべきですか。

「優れた指導の原則は、教会を含め、あらゆる種類の社会に適用できる。しかし教会の指導者は、指導者以上のことが必要である。そして仕える者であることが必要である。

指導者であることと、仕える者であることとの間には、明らかに矛盾がある。いかにして人は、指導すると同時に仕えることができるのだろうか。指導者は名誉ある地位を占めていないだろうか。指導者は命令し、ほかの人たちが従うことを期待していないだろうか。では、いかにして指導者は、仕える低い地位を、つまり命令を受け、実行する低い地位を占めるのだろうか。

この矛盾を解決するためには、イエスに目を向けなければならない。彼は、仕える指導の原則を最高の形で示された。彼の一生は奉仕の一生であった。その一方で、彼は、この世が目撃した最大の指導者でもあったのである」(G・アーサー・キーオ『今日の私たちの教会』106 ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① 仕える者としての指導者について、じっくり考えてください。もし何か実例があるとしたら、この俗世界の中で、私たちはどのような僕の指導者を見いだすことができますか。
- ② マタイ 20:25～28 を読み直してください。この世の理解の仕方と違い、「偉い」(マタ 20:26) という言葉の意味を神がどのように理解しておられるのかということについて、この箇所は私たちに何を教えていますか。
- ③ もし教会の指導者の任務の一つが一致を保つことであるとしたら、教会の指導者がつまずくときや、彼らが自分の人間性のゆえに完全な模範になれないとき、私たちはどうすべきでしょうか。
- ④ 教会の懲戒は、過ちを犯している人たちへの慈悲と愛の精神をもって実行することが、なぜ重要なのですか。懲戒の過程において、私たちはなぜマタイ 7:12 を何よりも心に留めておくべきなのでしょう。

まとめ

優れた教会組織は、教会の宣教と信者の一致にとって不可欠です。キリストは教会の頭であり、教会の指導者は、神の民を導く際にキリストの模範に従うべきです。一致は、神の言葉を忠実に教えることと、御言葉に忠実に生きることによって保たれます。